

まちの中でのアートの楽しみ方

出演 おかけんた、パラモデル(林 泰彦、中野 裕介)
日時 平成27年11月15日(日)／午後2時～午後4時
場所 あまらぶアートラボ(A-Lab room1)



お笑い芸人 / アート愛好家

おかけんた Okakenta

お笑いタレント(よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属)

現代美術のコレクターでありアート愛好家。京都国際映画祭のアートプランナーも務める。あまらぶアートラボ「A-Lab」アドバイザー。

2人組アートユニット

パラモデル Paramodel

林泰彦と中野裕介が2001年に結成したアートユニット。2003年にユニット名を「パラモデル」に。共に東大阪出身。

得意領域や趣向の異なるパラレル [parallel] な2人が「パラモデル [paramodel]:世界や心の色々な部品から組み立てる、詩的な模型/設計図」というコンセプトを核に共存、互いの視差 [parallax] と関係性を生かし、2人による「模型遊び」という要素をベースに多様な形式で作品を制作。

成功のカギは「ゴキブリ」

おかけんたさん (以下「おか」) よしもとがアートセクションを作っており、昔、京都花月があり、そこにギャラリーが併設されていました。ただ、当時のことは社員が誰も知りません。よしもとのタレントは絵を描くのが好きなものが多い。ジミー大西さん、鉄拳さん、キングコングの西野さんなど、西野さんは台北で作品を出展したりしています。

落語家の桂文枝さん、オール巨人さんも描いていて、それを私が紹介するなどしています。そうしたタレントがたくさんいる中で、映画を撮る芸人もいます。松本さん、板尾さん、木村祐一さんなどがそうですね。

ただ、ギャラリーを回ったり、作品を集めたりするよしもとの芸人は私しかいません。女優などの中にはそういう人もいます。あと、桂南光さん、杏さんなどもアート好きで有名ですね。私はパラモデルさんの作品を観に東京に行ったり、空いた時間にギャラリーを回ったりしていました。すると東京のギャラリーの間でおかけんたがそういうことをしていると噂になり、トークなどに呼んでもらえるようになったんですね。そんな縁で、東京国際フォーラムでアート展のナビゲーターなどを務めました。ほかのアートナビゲーターはポソポソ喋るが、私は喋るのが本業なので、声が大きく、やっているうちに人が集まってきます。それで私がすごく人気があるように思われてね、今はこっちの仕事が増えています。

今まで、関西エリアで、よしもとの漫才師がギャラリーや美術館で喋ることは無かったですが、私がこうして出演するようになりました。芸人だから言えること、というものがあり、例えば学芸員が草間彌生さんの作品を評論することはなかなか難しいですが、私の立場なら言うことができます。私が草間さんの色彩の心理分析をしたら「小学生」と出ちゃったんですよ。私は「変化球」。ほかの芸術関係の方とは違い、全然違う角度から話しをしたりしています。

現在は、よしもとで「アートプランナー」という肩書

きになっています。

パラモデル林さん (以下「林」) 僕たちは2001年から活動していますが、京都市立芸大学の同級生でした。二人とも東大阪出身という共通点もあって、バンド活動や学園祭の企画を一緒にやるうちに、その活動が続いて今に至っています。

おか 初めてパラモデルを見たのはブラレールを使った作品で、2005年の京都芸術センターでした。

林 作品をいくつか見てもらおうと思います。(写真を紹介) インスタレーションという、空間を使った作品です。このホールより大きい、高さも倍くらいの空間でブラレールを並べた作品を作っています。1か月半くらいかかっていますね。最初の展覧会は2人だけで作ってましたが、それ以降は色んな人に手伝ってもらって展示しています。

ちなみに中野は日本画、私はメディアが専門です。分野は違うが、アニメーションと一緒に作っているうちに、二人で模型遊びをしている感覚になりました。積み木で遊んでいる感覚かなあ、と言いながらやっていくうちにブラレールを使うようになってきたんです。

おか 最初の学芸員らの反応は?

パラモデル中野さん (以下「中野」) 2004年の最初、なんかおもしろくなりそうやな、という感覚は自分の中ではありませんでした。

林 自分もこれは面白いと思いましたね。できたばかりの天井のレールの上をゴキブリが走ったこともあったですよ。面白かったです。富山でもゴキブリが走りました。私たちにとって、ゴキブリは吉兆で、これが見ればきっとうまくいくと。オーストラリアで展示した時、このレールが各地に運ばれて巡回して行くのですが、オーストラリアの次の展示場所のアメリカに送ったパッキングを開けるとゴキブリが出て来て…。そんな話もありましたね。その地域には棲んでないゴキブリなので、オーストラリアから連れて来たのだと思います!

中野 西成のプレーカープロジェクトの企画では、泊まれる空間「レジデンス・パラ陽ヶ丘」を制作したのです

が、ここでもオープン間際にゴキブリが出ました!

林 ただ、ゴキブリは殺してはいませんよ。

おか 縁起やジククスというものはあるとは思いますが、それがゴキブリだとは。ちなみに、パラモデルはブラレールだけではありません。銀座のエルメス、東京都現代美術館など、西宮市大谷記念美術館での展示もされましたよね。

林 広い場所を与えられたらそれを使って作品を作り、ドローイングもやります。

中野 とにかく好きなことをやろう、と始めたのが僕たちユニット活動です。やり過ぎると混乱したり、中途半端になったりもしますが、やりたいことはまず何でもやり、それを続けるのが大事だろうと。

おか 絵を描いて展覧会をする人もいれば、パラモデルのように依頼を受けて空間を与えられてインсталレーションを行う人もいます。最近では後者のアーティストが人気で、増えてきましたね。お二人も忙しいでしょう。

中野 今は富山の発電所美術館で大きな個展を準備しており、今日この後、林は富山に戻ります。そんな感じです。

おか 空間を表現する方法が多様化しているし、その場所に合った空間で作品を作ることなどが注目を集めていますよね。

中野 先程の「レジデンス・パラ陽ヶ丘」も、西成のまちの一角で、上町台地という場所性を活かして作りました。

おか 地域という話で言えば、NHKのドラマ「あまちゃん」の音楽をやった大友さんが子どもオーケストラなどの活動をしています。音を鳴らすだけで良い、というような演奏会。指揮者によって色んなものができるのだ、と。そうした企画をまちの中でやっているのがプレーカープロジェクトです。

中野 まちに根ざした表現活動を開拓するプロジェクトですね。

おか 大山崎山荘美術館での活動は?

林 大山崎のときは二人ではなく、別々で活動しまし

た。私は公民館、中野は美術館でバラバラにやっていましたね。

中野 僕はあの時は、古い暖炉などもある山荘の建物を活かして作品を展示したり、まちの小学生と一緒に絵を描いて展示したり。

おか 地域と一緒にやる、というのが一つの課題になってきています。瀬戸内のように島でアートをしたり、越後妻有とか、古民家を使ったりといったこともあります。

林 我々も一番最初はそういう形で始めました。現代美術の美術館ではないところでよくやっていました。カレーとワインを出す店の近くの1坪半くらいの場所に展示したり。映画のセットのように戦前の雰囲気を残している場所の並びの角のおもちゃ屋の跡の商品用のガラスケースに作品が展示できるスペースがあったんです。アーティストにとっては「どこに展示するか」というのはドキドキ感がありますね。

林 今展示している発電所美術館も元発電所で、でっかいパイプやタービンがそのまま残っています。そのおもちゃ屋の跡も、おもちゃ屋の雰囲気が残っているところが面白く、最初の個展はここでやりたいと。

きっかけは百貨店

おか どこに作品を飾るかは、良いお皿を買って、どんな料理を乗せるのか、ということです。京都だと、派手なコンビニの看板が赤ではなく茶色になったり、沖繩のローソンは看板の青が濃かったり、「A-Lab」とか「まちの中の…」のシールとか、そういったものが1つ有るだけで全然雰囲気が変わります。

私がなぜアートにハマったかという話をしますと、私が借りていたセカンドハウスに真っ白の壁があって、これはと思う絵を買ってきて壁に飾り、ベッドを置くと、工夫したつもりが安っぽいらブホテルのようになって。そこから「空間」を意識するようになったのですが、部屋に置くものを間違えると、「これは違う」という存在になってしまう。その日のうちに別の抽象画の版画を買ってきて飾ると、そこがふわっと明るくなったように感

じました。千利休と同じです。茶室に花を一輪飾るだけで、照明を灯したように明るくなったりするんです。たった一輪の花で空間が変わるという経験が今まで無かったのですが、そういうことを気にするようになり、コンビニの看板も気になるようになった。そういった経験を経てきました。

林 どうやって現代美術の方向に進んでいったのですか。

おか 最初は百貨店です。子どもの頃から行っていたから行きやすく、京都・大阪・神戸を回りました。約30年前、「4時ですよーだ」が終わり、余裕がありました。美術を見て、インテリアを見て、布団カバーを見るなど、これまで行ったことが無い売り場に行くようになりました。ギャラリーや画廊にも行くようになりました。ヒロ・ヤマガタやアンディ・ウォーホールが100万円で作っているような場所です。たまたまロックが好きだったので、キース・リチャーズの版画を買いました。そこから、「ギャラリーというものがある」と知りました。入りやすい所と入りにくい所があり、最初はキャンバスを買うのは怖かったです。分厚い新刊を買うようなもので、それに比べて版画は100枚刷るうちの1枚ということで買いやすいです。

そういうことをやっているうちに、よしもとから「作品を作ってみないか」と言われ、会社から「アートのプロデュース」の仕事をもらうことになりました。

30代後半のとき、ある花屋さんでワインのパーティがあって、ラテンを踊っていました。ミナミのそういう集まりの中にギャラリストが1人いて、話しかけられて、そこから現代美術を観るようになりました。遊びから自然の流れでそうになりました。

林 好きなものを探求しているということですね。

おか 実は、子どもの頃から120%アートが嫌いでした。ピカソの絵の何が良いのか分からなかったし、風景画も、写真なら写真で良いのでは、とか。アートと縁遠いと思っていたのですが、こんなにハマってしまうとは思わなかったですね。自分の部屋にこのポスターを



おか けんたさん

飾ったらカッコいい、と思って買ったのにカッコ悪かった、それでは寝付きが悪いと思い、そのままにしておくので、その日のうちに買い直しに行って、別のポスターに変えたら部屋が明るくなりました。そこからアートに関心を持つようになりました。

地域の中でパッと見つけたもの「こんな所にカフェがあったのか」など。ここ、前は何屋だったか思い出せないことがあります。変化したのを見つければインプットされますが、また風景にとけ込むと分からなくなります。それと同じで、一枚ポスターを置くだけで変わることです。

京都は映画発祥の地です。京都国際映画祭では、アートを取り入れようと、アートも映画もみんな入ってやっています。まちが持っている本来のチカラを引き出すということです。「まちおこし」と「観光」は違います。一つの物でお客さんと呼ぶことを観光と呼んだけれども、それは好きではありません。

「映画」と「映像のアート」との違いは難しいですが、そうしたボーダーラインは無しでフラットに見てもらいましょう、というものです。

時代劇の小道具の貸出をしている会社があるのですが、映画の監督が小道具を借りて来て映画に使われます。その刀の鞘に蒔絵を入れてあるのですが、それに400万円以上かかっています。それが地域の経済を活性化させるし、地域のチカラでもあります。映画が京都を支えていたのは、アートが地域を支えていた

ということです。そこが京都の面白さです。

中野 そういえば、太秦の撮影所は元々は東大阪にあり、火事で燃えて、太秦に移ったそうですよ。

おか 東大阪も、下町ロケットなど地域のチカラがあります。尼崎も白髪一雄など、地域としてのチカラもあります。

アートを体験できる場所に

おか パラモデルはワークショップもやっているよね。

林 プラレールを作ってみんなで写真を撮ったり、絵を描いたり。プラレールのワークは海外でもやっていますよ。

おか アートって、作品を見るだけでなく、作ってみる、体験してみる、ということも大切ですよ。

中野 アートの意味が、世間でどう捉えられているか、よく気になります。美術館で飾られているものだけでなく、多様化していますからね。社会と関わる表現や、映画や映像、体験型もそう、形容しがたいけど面白い、今のアートはそんなニュアンスでしょう。

林 プラレールを作って崩して、という動画を真上から撮影し、高速で動画として再生する作品を作ったりしています。

中野 簡単にカテゴライズできない作品こそ、アートと言えるかもしれません。

おか 印象派、モネなど「キレイ」というのも良いで



パラモデル（左から林さん、中野さん）

すが、体験してみる、というのもアートです。今年面白かったのが、「うまい棒」に仏像を彫るアーティストで、「うまい棒」に円空を彫ります。そのアーティストをお呼びして、河原町から10分の元小学校だった建物で、うまい棒のパッケージを金に変えて2万5千本用意しました。金のうまい棒を山のように置いて、来た人に金のうまい棒を持って帰ってもらい、黒板に自分の名前を描いてもらいます。このうまい棒の数は1年間の不登校の数で、それを持って帰ってもらうというアクションをします。

「コンセプチュアルアート」という、コンセプトを持ったアートです。普段は仏像を彫っていて（うまい棒に彫っていて、失敗したら食べるとのこと）このコンセプトは素晴らしいです。学校の中で「学びと気づき」をテーマにしています。学校は行くことと記憶が戻る、記憶の宝庫です。

あとは、澤田知子さんという、写真を使うアーティストがいます。学校に卒業生の写真が飾っている中に、卒業生全員が澤田知子、という作品を紛れ込ませました。これは80年の小学校の歴史とのコラボ作品であるということで、アートが地域とどうやって関わっていくのか、ということから言うと、写真で関わったということとです。

京都市役所前広場では、ビートたけさんと一緒に作品を作ったりしているヤノベケンジさんと明和電機、オーマイキーの監督の石橋義正さんと、8mのロボットを作りました。京都は文化財が多く、絶対に火を使ってはいけないのですが、半年間市役所に通って許可を取り、ロボットに火を噴かせたんですよ。

「京都は人を試す」というサブタイトルを付けて開催しました。京都は歴史がある場所なので、みな新しいものは様子を見ます。京都は新と乱を好む、古い物と新しいものが混ざって面白くなっていく。

お笑い芸人が作品をウチワでおおぐ企画もやりました。テオヤンセンの作品をみんなで見上げて動かし、市民と一緒に京都のまちを歩く、という企画です。タレン

トと一緒にやることで市民に関心をもってもらえます。

テオヤンセンのミニビーストを作るワークショップをやって、そのプロセスを映画にしたものを上映しました。子どもたちに、将来、アーティストになって欲しい、という思いで京都市にプレゼンしたんです。

実際に、子どもが「かっこええな、テオヤンセン」と叫んでいるのを見て、感激しました。A-Labでもワークショップをしているし、子どもたちに、「見るだけでなく体験してもらうこと」をこれからも尼崎でやって欲しいです。来年100周年ということで、尼崎には何があって、何が魅力か、ということを追求めて欲しいですね。

アートで「喜ぶ」こと

林 尼崎と東大阪は似ています。

おか 自分の住んでいるまちはどういうまちか、どうしたら楽しくなるのだろうか。1年目、2年目、3年目とやっている则だんだん変わってきます。今年は京都水族館でイベントをしました。

中野 やっていて大事なのが「喜び」ですよ。作品は色んな葛藤の中で作りますが、完成したときには何か試合が終わった後のような喜びがあります。作品には「面白い」「わからん」など、印象は様々あると思いますが、作り手としては新しい感触の喜びを常に探して行きたいです。視点次第で、一見平凡なまちの中でも、色んなものを読みとれるし、この世界に居るだけで面白い、みたいになってくる。

おか 違和感的な部分も楽しめます。カレーが、普通のと全然違う色のカレーでも食べたくなったりします。そこはいろんなものに興味をもっていただければと思います。

地域地域の楽しみ方もあるし、個人個人の楽しみ方もある。自分は万華鏡が好きで、万華鏡はオイルの中に鳥の羽や砂や、色んなものが入っています。言えるのは同じカタチにはならないということ。一人で楽しめるアート、脳も体も活性化します。テオヤンセンはすご

く子どもが喜ぶ。自分はぶきっちょよだったが、それを作って風で動いた喜びです。パソコンでカチャカチャしているだけでなく、パラモデルの作品のように、その空間までいかないと楽しめないものがあります。京都の小学生は美術のレベルが高いです。京都の小学校で、小学生が描いた絵が飾ってありましたが、半端じゃないうまさでした。ただ教科書どおりうまいだけではなく、素晴らしかったです。段ボールで山車を作っていたりしてました。

ベットボトルキャップで子どもたちと作品を作りましたが、子どもは大興奮、一生忘れない経験になったと思います。将来、化学反応が起きるきっかけになるのではないかと思います。

自分は子どもの頃、耳鼻咽喉科に飾っていた女性の絵をいつも見て、その絵に挨拶までしていたという体験があります。自分が大人になってから買う作品は女性像ばかりで、なぜかというのになんと気づいたのが、この絵のことでした。これが原体験になり、女性像ばかり買うようになったのだと思います。それが自分の原体験で、女性像を見ると安心するのだと思います。

楽しみ方ってなんなのかというと、例えば子どもの頃、電車が好きだったとすると、パラモデルの作品を見ると電車のワクワク感があります。そういった記憶を呼び起こす役割がアートには有ると思います。秋は色んなことを思い出す季節、あの頃こうだったのだ、としみじみと思うようになりました。

林 自分にも原体験がある。子どもの頃、おもちゃとかプラモがメチャメチャ好きで、そうした原体験があって、作品を制作する中で、プラレールを使い始めたのだと思います。

中野 芸術とは幼心の完成である、という言葉があります。幼少期にどういった経験をしたかは後の発想力に大きく関わるので、そのあたりを大事にするのは、地域活動や教育の面でも重要です。

おか 教育は「育てる」ということです。色んなものがドンドン短くなっています。お笑いでも、8.6秒バズー

力を見ても分かるのとおり、短く笑わせなければならなくなってきました。そうすると、今度は15分で笑わせることができなくなってきました。

くっきーさん（野生爆弾）とライブペインティングしたり、又吉直樹さん（ピース）と新四字熟語の企画をしたり、そうしたことを私はよしもとで活動しているところですよ。

中野 アートの事って、あまり興味がない方に説明するのは難しいのですが、おかさんのように、アートと一般の方とをつなぐ存在は貴重ですね。

おか 不思議な話があって、自分の両親の名字は「あずみ」と「おりた」なのに、自分の名字は「あきやま」。おかしいので親に聞くと、ある人から買った名だと言うことです。私の家系は、父が11人兄弟で、親戚は100人以上いるが、声とか喋りを売りにしている人は自分だけです。だが、自分の名の元になった、名を継いだ人が映画の弁士を仕事にしていた人でした。その人の名前を継ぐことで自分がその人の持っていたものを受け継いだように思っています。これからは芸術や話芸を伝えていきたいと思っています。

中野 僕は、当面は富山での個展「バラ基準と変調」、西成「レジデンス・バラ陽ヶ丘」での企画があります。滋賀のボーダレス・アートミュージアム NO-MA では、県内30施設の障害者の作品を展示する「ing展」のアドバイザーを僕は務めます。

林 新潟と越後湯沢の間を走る電車のキッズスペースの内装をやることになっていて、6年限定で4月から運行することになりました。

おか こうして、我々の生活の中にアーティストが関わっているということですね。

中野 他に、赤塚不二夫さんへのオマージュ作品を並べる企画展もあります。村上隆さんや荒木経惟さん、イラストレーターの安斎肇さんなどの作品が並び、ボーダレスな展覧会になりそうです。

おか 私は20日にナレッジサロンでアートトークを行います。アートの話とアート体験。来年は美術館のキュ

レーションの話があるのと、沖縄国際映画祭でのアート展を予定しています。

【客席から「アートで生活していくことは大変か」、という質問があり】

中野 アートだけでやっていくのは難しいので、学校の非常勤講師などもやっていますが、そういったアート以外の仕事の経験も、制作や発想の大切な要素になっていると思います。